

苦痛を見ない観光客たち

—友ヶ島に刻まれた沈黙と“無関心”の時代—

和歌山大学観光学部 遠藤研究室 LYU JIA YAN 呂嘉琰



1、研究背景

近年、SNSやアニメで人気になった「友ヶ島」は、多くの観光客を惹きつける観光地になっている。特に、その独特な軍事遺跡や自然風景が注目され、宮崎駿監督の映画に登場されたラピュタの島に似ていることから、「ラピュタ島」とも呼ばれ親しまれており、観光地としての魅力を強く放っている。しかし、かつて軍事要塞であった友ヶ島は、実際に戦争が行われていないのみならず、軍艦島のような強制労働や加害・被害の構造が明確にあったわけでもない。ここにもう一つの苦痛の在り方を考えてみたい。友ヶ島は、明治から昭和にかけて本土決戦を想定して構築された軍事要塞であり、**実際に戦争が起きなかったという事実の暗闇には、それが起きる可能性に備えた深い緊張と不安が存在していた**。現在、友ヶ島は戦争の記憶を未来へと伝える場所であり、**現代日本における平和観念の象徴的存在**でもある。この「戦うために作られた空間」や「準備された戦争」は、現在では観光地化され、「映える風景」として消費されている。一方で、観光客の増加に伴い、島の限られたインフラに負担をかけ、遺跡保護や自然保全、観光開発のバランスが重要な課題となっている。

4、地区概要



「ラピュタの島」と呼ばれる友ヶ島は、地ノ島、虎島、神島、沖ノ島の四つの島から構成され、「友ヶ島」という単独の島は存在しない。本研究では、その中でも**要塞遺構が集中する沖ノ島**を調査対象として選定した。沖ノ島には、明治3年(1890)8月に築造された要塞遺構が遺った(武内 2020)。東京大学川添研究室(2020)は、友ヶ島について「**縄文・弥生時代の生活痕跡、修験道の聖地、明治期以降の軍事要塞、そして現在の観光地**」という多層的な時間構造を有していると述べており、時代によって意味を変えてきた変遷だからこそ、観光資源としての厚みを生み出している」と指摘する。近年では、アニメ『サマータイムレンダ』の舞台モデルとしても注目されており、**歴史的関心とポップカルチャーの関心が交錯する観光地**としての性格を持つ。

2、研究目的

多くの観光客は、友ヶ島の歴史的背景や戦争の記憶に目を向けることなく、**風景や「インスタ映え」といった視覚的消費に止まっている**ように見える。

私たちは、なぜ苦痛を見ていないのか?なぜその歴史や背景に無関心なまま訪れるのか?その暗闇には語られないままの苦痛が静かに横たわっている。本研究では、以上の問題意識を起点に、苦痛や記憶に無自覚な観光客の姿を手がかりに、現代社会における**無関心の構造**を問う直す。

また、友ヶ島の事例を通じて、**地方における記憶の空洞化と観光の未来的あり方**について考察し、忘却がもたらす社会的リスクを浮き彫りにしたい。

そのような「目に見えない苦痛」に対して無関心なまま訪れる観光客の行動を明らかにする。

3、研究方法

本研究では、**文献分析**や**フィールドワーク**、**インタビュー調査**、**共起ネットワーク分析**等を併用してデータ収集を行った。

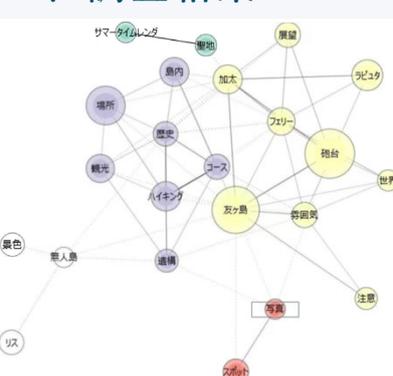
文献分析では友ヶ島の歴史的背景および過去の研究成果を収集・分析した。

フィールドワークでは現地来島者の行動・関心の傾向を観察し、写真撮影や動線記録を行った。

インタビュー調査では現地来島者への簡易インタビューを実施し、来島者の関心と認識を明らかにした。また、和歌山市観光課へのインタビューや問い合わせを通じて、近年の来島者数・保存方針・安全対策などについて調査を実施した。

共起ネットワーク分析では、観光客の傾向を明らかにするため、Google Map上に投稿された友ヶ島の口コミデータを収集し、テキストマイニング「KH Coder」を用いて共起ネットワーク分析を行った。口コミを可視化することで、観光者の関心領域やまなごしの方向性を抽出した。

5、調査結果



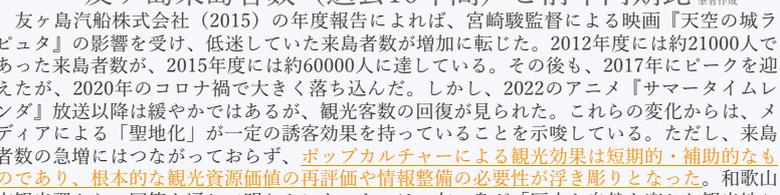
共起ネットワーク分析から、友ヶ島を訪れる観光客は「**体験見学型**」「**廃墟探検型**」「**聖地巡礼型**」「**高視覚消費型**」の4つタイプに分類できることが明らかになった。しかし、すべての観光客がある程度の「視覚消費(写真撮影・SNS投稿など)」を行っている点を踏まえ、本研究では「視覚消費型」という独立した分類ではなく、**それぞれのタイプにおける視覚消費の強度や目的の違い**に注目する方法へと整理した。

たとえば、「体験見学型」の観光客は主に「**学び**」や「**理解**」を目的として撮影を行い、「聖地巡礼型」は「**ロケ地の撮影**」や「**感情共有**」を目的とする。一方で、視覚的美しさや「**インスタ映え**」そのものを主な目的とする観光客を「**高視覚消費型**」と定義し、**目的の違いに基づく分類の明確化**を行った。

筆者作成(口コミ119件の中に90件抜粋)

- 体験見学型観光客:** ハイキングやガイド付きルートを楽しむ観光客である。地域の歴史・文化への関心が高い。
- 廃墟探検型観光客:** 砲台や要塞という戦争遺構と自然に包まれた幻想的雰囲気を楽しむ観光客である。廃墟や「天空の城」的世界観に惹かれる。
- 聖地巡礼型観光客:** アニメやドラマなどの舞台となったロケ地を訪れる観光客である。作品とのつながりを求めて行動する。
- 高視覚消費型観光客:** 主目的が視覚的満足のために訪れる観光客である。SNSでシェアや「インスタ映え」を重視する。観光地の意味より「見た目」を重視する。

友ヶ島来島者数(過去10年間)と前年同期比



友ヶ島汽船株式会社(2015)の年度報告によれば、宮崎駿監督による映画『天空の城ラピュタ』の影響を受け、低迷していた来島者数が増加に転じた。2012年度には約21000人であった来島者数が、2015年度には約60000人に達している。その後も、2017年にピークを迎えたが、2020年のコロナ禍で大きく落ち込んだ。しかし、2022年のアニメ『サマータイムレンダ』放送以降は緩やかではあるが、観光客数の回復が見られた。これらの変化からは、メディアによる「**聖地化**」が一定の誘客効果を持っていることを示唆している。ただし、来島者数の急増にはつながっておらず、**ポップカルチャーによる観光効果は短期的・補助的なものであり、根本的な観光資源価値の再評価や情報整備の必要性が浮き彫りとなった**。和歌山市観光課からの回答を通して明らかになったのは、友ヶ島が「歴史と自然を楽しむ観光地」として認識されているが、戦争遺跡としての記憶を積極的に保存・発信する姿勢には乏しいという点である。島内の**案内板については、令和6年度に修繕・更新が行われた**ものの、施設の老朽化については依然として対応が進んでおらず、**現状維持の方針にとどまっている**。このような状況は、戦争遺跡全体に共通する課題ともいえる。神田(2022)は『ランドスケープ研究』において、日本全国に残る戦争遺跡が「時間とともに忘れ去られ、保存が困難になっている」と指摘し、**保存には多面的な視点**が求められると述べている。また、安全対策にも限界があり、観光者のニーズと遺跡保護の間にあるジレンマが浮き彫りとなった。

考察

ジョン・アーリー(2014)の「観光のまなごし」によれば、観光とは**社会的に構成された「見るべきもの」を消費する行為**である。友ヶ島では、アニメやSNSで拡散された「ラピュタの廃墟美」といった視覚的イメージが観光客のまなごしを強く支配しており、本来の島が持つ軍事要塞としての歴史的背景は、観光の現場から見えなくなっている。観光メディアでは、**歴史的背景よりも「映える景色」や「ザ・友ヶ島の」**側面に過剰に可視化されており、観光客のまなごしは「歴史に向けるまなごし」から「**幻想的風景を楽しむまなごし**」へとすり替えられている。このようなまなごしの転換には、アニメやメディアによる視覚的表象の影響も無視できない。つまり、友ヶ島の観光においても、我々のまなごしは「過去の意味を読み取りうるまなごし」と、「現在の美しさを消費するまなごし」との間で分裂している。その結果、**戦争遺跡としての友ヶ島の語りや記憶の継承が観光行動の中から抜け落ちつつある**ことも明らかであり、「**記憶の空洞化**」が進行しているといえる。

山口(2017)は、零戦展示の事例から戦争観光において、「戦争の記憶と視覚的興奮との融合」を促す現象をもたらしている」と指摘しており、**視覚にイメージの強調が消費化と記憶の継承に歪みを生み出す可能性**が示唆される。これに対して、東京大学川添研究室(2020)は、友ヶ島の歴史や文化を「時代ごとの痕跡として未来へ継承すべき資源」と捉え、現在の観光の視線に埋もれがちな記憶に目を向ける必要がある。

この両者の視点から、**視覚的消費と記憶継承の間にある緊張関係**を明らかにし、観光地としての友ヶ島をいかに語り直すかという問いを私たちに投げかける。その問いに向き合うためには、友ヶ島を「ラピュタ的風景」として消費するのではなく、**歴史の痕跡と視覚的魅力が交差する場所として再認識し、記憶と観光の共存を模索する視点が不可欠である**。

展望

本研究から浮かび上がるのは、**観光を通じて記憶を繋ぐための「媒介装置」の不在**である。和歌山市観光課へのインタビュー調査においても、遺構保存への具体的な取り組みや案内の整備は不十分であり、戦争遺跡としての情報提供も限定的である。現在、友ヶ島の観光は多様なまなごしが交錯する場所となっている。視覚的に消費される風景の暗闇には、語られなくなった記憶や歴史が静かに埋もれてしまう。本研究を通じて、現代の観光に求められるのは「**楽しいだけではない旅**」、すなわち**見ることの意味を問い直し、記憶と責任を継承する観光のあり方**である。その実現には、観光と記憶を繋ぐ新たな「媒介装置」と、それを支える**地域と行政の意識改革**が不可欠である。菊池(2013)は、地域史的観点から戦争遺跡研究が進められていることを報告しており、群馬県を事例に**史跡と文脈の理解と教育的活用**の重要性を強調している。今後の課題としては、観光地としての友ヶ島が持つ歴史の意味をいかに観光客に伝えるのか、記憶を継承していくのかという視点が重要である。観光客の多くの視覚的の魅力に惹かれて訪れる現状では、**歴史や戦争に関する情報が十分に提供されていないことは、「記憶の空洞化」や「観光の軽視化」に繋がるリスク**を孕んでいる。最後に、メディアの連携を重要視する。視覚的魅力を活かしつつも、その背景にある歴史の意味や記憶とともに伝える表現方法や編集方法が求められる。戦争を直接経験しない世代が増えていくなかで、観光を通じて記憶を繋ぎ直す意義を再確認し、地方における「**語りの再構築**」を実現していくことが望まれる。

参考文献: 神田 麻衣子・恩田 乃生(2022)。「日本における戦争遺跡の現状と課題」『ランドスケープ研究』85(5)、pp.521-524。日本造園学会編。 新地 実(2013)。「近代日本の戦争遺跡研究」『地城史研究』新編2号。群馬県立歴史博物館。 武内 雅人(2020)。「友ヶ島火薬庫の保存と活用に向けて」『和歌山地方史研究』。 友ヶ島汽船株式会社(2015)。「IT技術を活用した一観光客の満足度向上のための仕組み作り」。 東京大学先端技術研究所川添研究室加太分室地域ラボ(2020)。「時代の痕跡を残す記述海峽の無人島・友ヶ島」。 山口 晴(2017)。「零戦展示による戦争観光の現代的変容」『日本文化人類学会研究大会』日本文化人類学会第51回研究大会。 ジョン・アーリー(2014)。「観光のまなごし」(増補改訂版)加太 宏邦訳。法政大学出版局(原書1990)。 1) Ja.Wikipedia.org/wiki/友ヶ島。最終閲覧日:令和7年6月17日。 2) 和歌山市観光課(2025)。「友ヶ島に関する観光者数統計および整備状況に関する回答書」筆者によるインタビュー調査記録(2025年6月)。